

本

車はウソをつかない

阿部公彦

『ボルシエ太郎』——羽田圭介

タイトルはいかにも軽い。まるでボルシエジャパンとのタイアップ小説のようだ。しかも読みはじめてもボルシエ、ボルシエ、ボルシエのオンパレードで、いやでもボルシエが気になり、好きになり、恋しくなり、ついには切ない気分がこみ上げてくるというストーリー。

なんだそりゃ？ それでもちゃんとした小説か？ という人もいるかもしれない。しかし、タイアップであろうとなかろうと、これは全国の青少年に読ませたい作品だ。いや、中高年にも読ませたい。中高年にこそ読ませたい。羽田圭介らしい、どこまでもキレのいい文章のハンドリング、鋭くツボをつく心理描写の精妙なコーナーク、きわどいずらしと遊び、クライマックスに向けてのお尻から突き上げてくるような、ほんとど悪夢のような加速感。しかもこの上ない感觸のよさを盛りこんでいな

せる彼は勝ち誇ったように「人生が鬱屈していて仕方ない雑魚みたいな人間ほど、審判がおらず勝ち負けも不明で不毛な小さい勝負で勝ちにいこうとする」との気分ひたるが、ときにその高価な買物物の高い維持費にうんざりし「金に乗らされている」とも感じる。かと思ふと、他人に貸したボルシエの「でつぷり」と丸みを帯びた尻が遠ざかっていくのを見ながら、「俺が追いつけない俺のボルシエはなんて素晴らしい車なんだ」と感慨にふけつたり。大量生産の工業製品にすぎないボルシエが、こうして魔法の鏡のように所有者の自意識や感情の壁を引き延ばして映し出すのである。それにしても中年男にとっての「車」は何と悲哀感に満ちていることだろう。

筆者も最近、使い古したマットレスのように体に馴染んだ十年ものマイカーを、車検の直前に「もう無理か」としげしげながめ、ついに買い換えを決断したが、ディーラーで新しいモデルに試乗してみるとどうだろう。使い勝手の分からない最新装置に戸惑いつつも、道路を走ってみると「うん、曲がったときのつかまへ感がいいね」とか「踏みこみでブオッと飛び出すね」などと、訳知り顔のコメントをならべている。思い出すだに恥ずかしいはしやぎ

がら、ときにはふつと視界がひらける。あるいは真つ黒い闇がおりてくる。そんなときの冷たくドキッとする心地がまたいい。このダイナミックな滑走感はずっとやそつとのノワール系文学では体験できないだろう。それが可能になるのは、大胆な筋書きにかかわらずこの作品がハイレベルの心理小説ともなっているからだ。

主人公の大照太郎は天才でも秀才でもないし、かといって飛び抜けた無能さもない。ほどほどに人がよく、ほどほどに人が悪く、ほどほどに運が良かったり悪かったりする凡人。取り柄もないが、いかにも小説に出て来そうなヘンタイ性や、人並みはずれた不幸を抱えているわけでもない。ほんとど誰でもいい人。

しかし、そんな彼が少しだけ人と違うのは「運命の訪れ」に見舞われたことだった。彼は転機に身を任せる。ボルシエを購

ぶりがだが、あれはいったい何なのか。スポーツカー年齢をとくにすぎた筆者のような老おっさんでも、車にのると男の子ごころが刺激される。それが悲哀なのは、とうに「男の子」でなくなつた人間ほど、より切実に「男の子」であつた自分を思い出すからだろう。かつて坂道をブレーキをぎりぎりまで我慢して猛スピード（の自転車）で滑走した、もうどこにもない、あの自分がそこには甦る。

しかし、大照太郎が教えてくれるように、そんな「男の子」も、老おっさんの中にはステータスとか権力といった中年くさい記号に置きかえられてしまう。いつの間にか老おっさんは、車の威光を借りたボス猿よろしく世界を見渡している。

『ボルシエ太郎』には主人公大照太郎の人生が凝縮されている。地味で今一つだったけど、何とか人並みにやつた大学時代から、会社をやめ起業するまでがいわば前史である。そこから彼の人生の本番、となはずだった。しかし、車の威光を借りたボス猿の天下も長くは続かなかつた。ボルシエの勢いで裏社会に踏みこんだ彼は、おそろしい暴力の世界を目の当たりにしつつも虚勢の張り方を覚えたが、次第に使われ

入するのである。銀座の路上で目撃したマクラーレン。そのハンドルを握る、スポーツカーにまったく似つかわしくない老人。彼はそこに人生の虚しさを感じてしまった。彼は思う。年取って蓄財してから高級車を手に入れても仕方が無い。今、この人生のただ中で、この現在を謳歌しなければならぬ、と。

ここで彼は一気にアクセルを入れる。零細企業とはいえ、社長だけあって決断は早い。ボルシエのディーラーを訪れ、複数のモデルに試乗。結局彼は九一一を中古で買うという選択をとつた。約一五〇〇万円。恵比寿の一五万そこそこのワンルームマンションに住む人間としては相当思い切つた買い物だ。

この後、まるでこの無理して買ったボルシエが乗り移つたかのように、彼の人生は加速度的な展開を見せることになる。車はおそろしい。車種の好み、購入時の方法、乗り方と接し方（両者は微妙にちがう）、そして別れ方、すべてに性格が出る。いや、それだけではない、車との付き合い方とおして人は変わっていくのである。

羽田圭介はきめ細かい職人の手さばきで、そんな大照の心の動きを描き出している。手に人れたばかりのボルシエを疾走させていく。会社の窮状。仮想通貨への投資の失敗。美しい女との極楽のようなセックスも暗転のときを迎え、ついには生命の危機が迫る。クライマックスに用意される恐ろしい場面の描き方も実に洗練されていて、鼻白むような過剰さはない。

車とくれば女だろう、という声も聞こえてくる。車小説は、一種の変形恋愛小説じゃないのか？ と。たしかにそうかもしれない。しかし、やはり車は工業製品なのだ。あくまで消費財なのである。そしてボルシエとくれば、遠い昔に過ぎ去つたパプルの匂いもある。この小説にもたしかに、田中康夫の『なんとなく、クリスタル』を思い出させるような、消費行動マニュアルの手つきはある。金をどう使い、何を買い、何を食べるか、そんなバブリーな人生のマニュアルがちらちらと見せられる。しかし、もはやバブルの時代ではない。だからこそ、その芯にあるのは悲哀なのだ。深い憂鬱なのだ。ボルシエに憧れ、自分を投影し、人生を狂わされてしまいつつ好きでいることをやめられない。恋愛以上に恋愛な、中年男の消費小説なのである。

（河出書房新社刊・一四〇〇円）